

観光(見世物)的まなざしと偽物／本物 —『ジャンク』『川口浩探検隊』『水曜どうでしょう』

国際文化学研究推進センター2017年度研究プロジェクト
「映像メディアにおける注意と情動に関する領域横断的研究」
第2回研究会

2018年3月2日(金) 15:30～18:30
@神戸大学瀧川記念学術交流会館小会議室



奈良県立大学 地域創造学部
地域創造学科 准教授
岡本 健(OKAMOTO Takeshi)

E-mail: zombiestudies2017@gmail.com
okamoto@narapu.ac.jp

自己紹介： 岡本 健（おかもと たけし）

- 1983年 奈良県奈良市生まれ
- 北海道大学文学部で認知心理学（聴覚心理学、音楽心理学）を専攻
- 2007年 北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 修士課程に入学
- 2012年3月 同大学院 博士後期課程修了



→博士（観光学）取得

博士論文「情報社会における旅行者の特徴
に関する観光社会学的研究」

- 2012年4月 京都文教大学 総合社会学部
文化人類学科 特任（任期付）講師
「観光学概論」「観光政策論」「観光ビジネス論」など

自己紹介： 岡本 健（おかもと たけし）

●2013年4月 奈良県立大学 地域創造学部 地域総合学科
講師「メディア産業論」「メディア・コンテンツ論」担当

●2015年4月 奈良県立大学 地域創造学部 地域創造学科
准教授 【現在に至る】

●非常勤講師として…

「観光史」「観光政策」「観光社会学」

「観光メディア文化論」「観光メディア論」

「メディア社会学」「地域表現法」

「コミュニケーション論」「観光心理」

「観光コミュニケーション論」

「サブカルチャー論」「日本のサブカルチャー」

「ソーシャルメディア論」「コンテンツビジネス概論」

和歌山大学、愛媛大学、立命館大学、同志社女子大学など

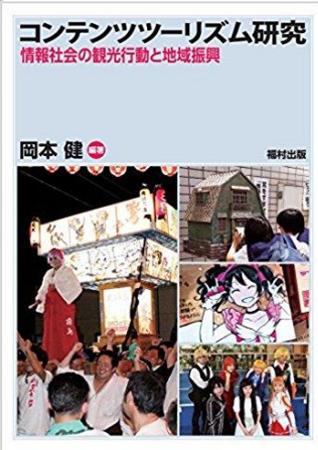
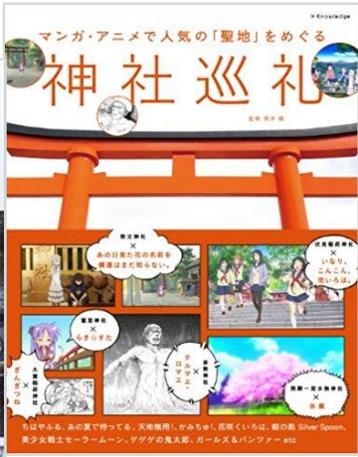
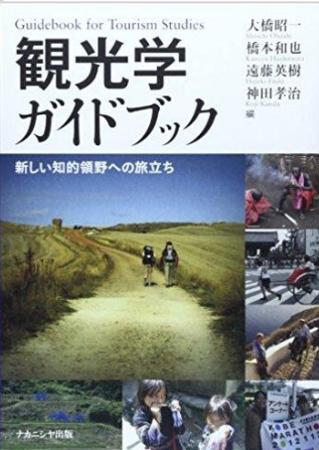
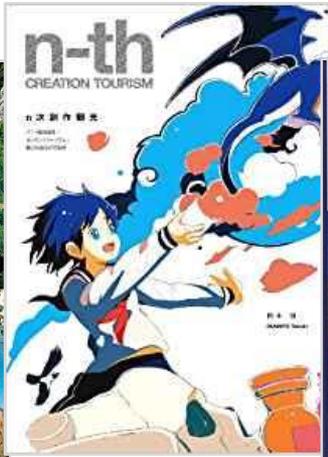
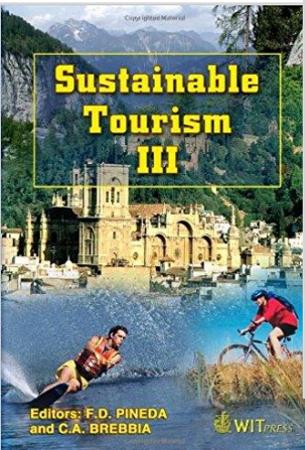


書籍

n次創作観光

マンガ・アニメで人気の「聖地」をめぐる神社巡礼

メディア・コンテンツ論



Sustainable Tourism III

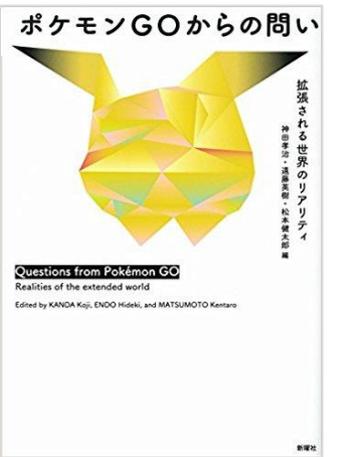
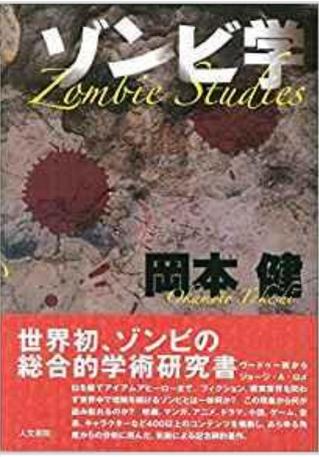
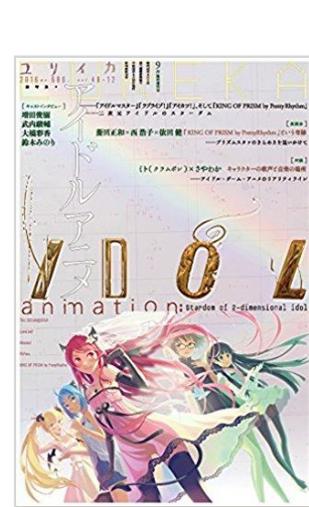
観光学ガイドブック

コンテンツツーリズム研究

マンガ研究13講

ゾンビ学

ポケモンGOからの問い



ユリイカ 特集: アイドルアニメ

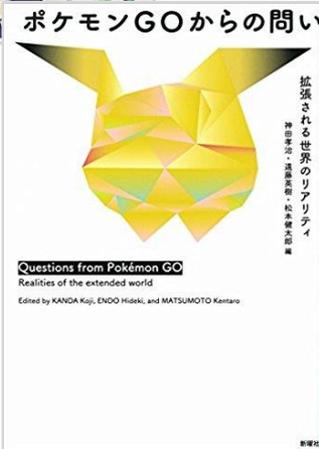
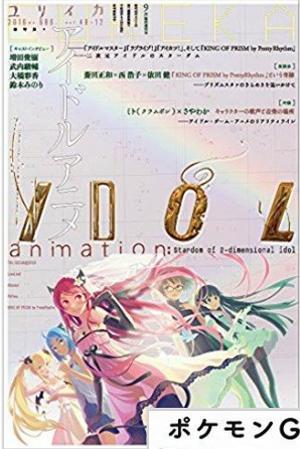
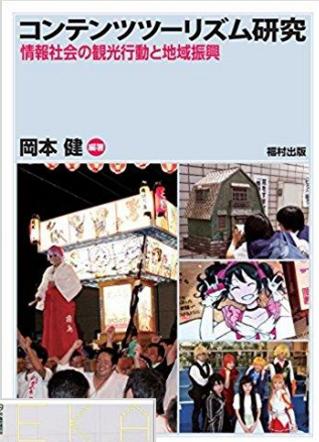
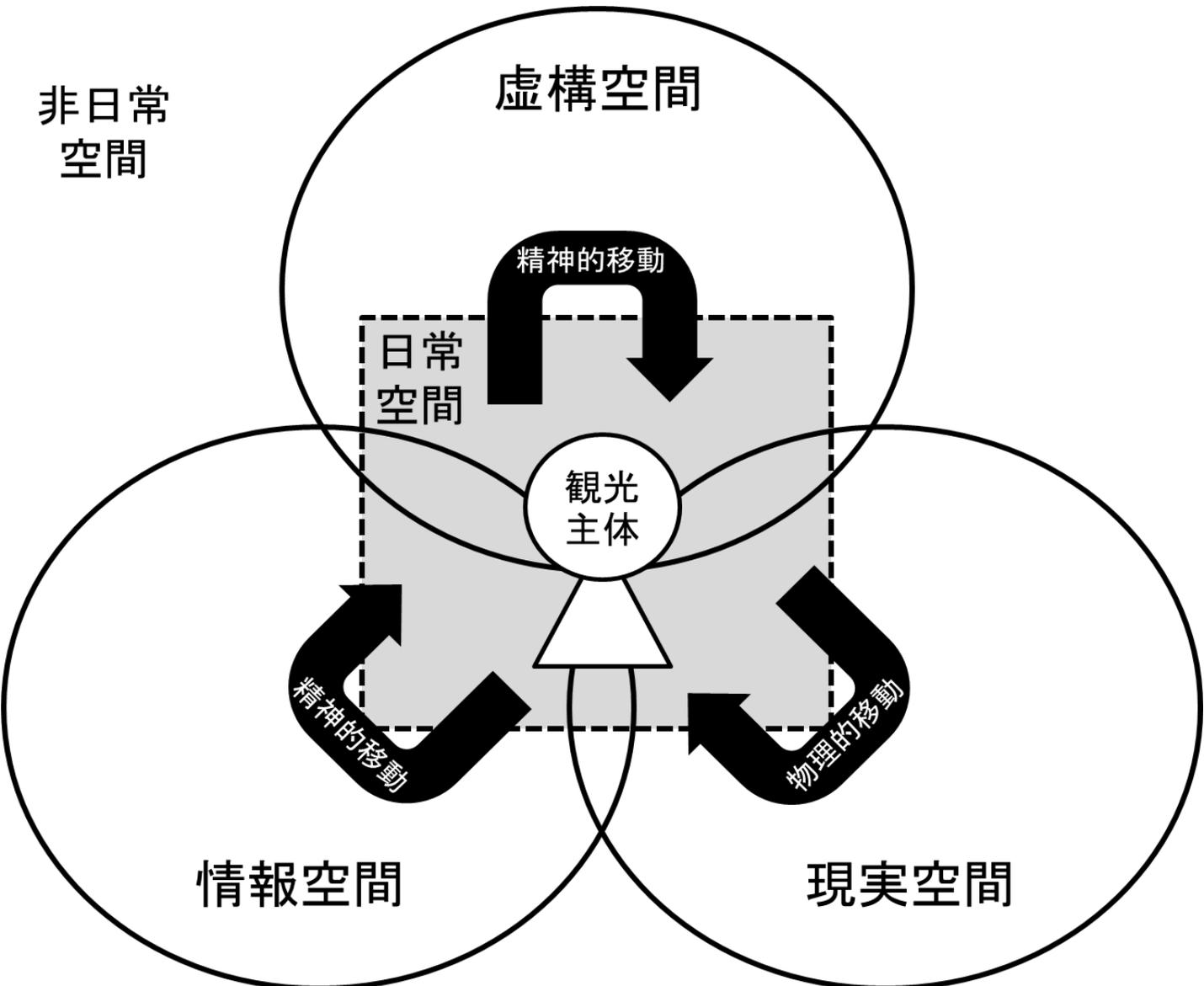
マンガ・アニメで論文・レポートを書く

わたしの「もったいない語」辞典

本日の内容

0. コンテンツツーリズム、ゾンビ研究からのモデル
1. 『ジャンク』と残酷映画
 - 観光(見世物)のまなざし
2. 『水曜スペシャル 川口浩探検隊シリーズ』
 - 偽物の中でのリアリティ
3. 『水曜どうでしょう』
 - 「二重構造」の物語と実践が観光のまなざしを変える
4. 『探検隊の栄光』
 - 虚構を前提とした「多重構造」の物語へ

0. コンテンツツーリズム、ゾンビ研究からのモデル



1. 『ジャンク』と残酷映画

—観光(見世物)のまなざし

●『ジャンク 死と惨劇』(1978年)

- ・残酷(モンド)映画ブーム(1970年代)
- ・オカルトブーム(1970年代)
- ・ホラースプラッターブーム(1980年代)

『ゾンビ』(1979年:日本公開)

キャッチコピーが

「地獄の底から這い出して、ゾンビが食う、人間を食う！
残酷映画史を真紅の血糊で塗り替えた驚異のスーパー
残酷！肉をくれ！もっと若い肉を！」

詳細は『ゾンビ学』(人文書院)をご覧ください。

1. 『ジャンク』と残酷映画

—観光(見世物)のまなざし

- 観光研究では「まなざし」論がよく語られる
- とくに、この「まなざし」がメディアによって形作られることが前提とされる
- 観光社会学では、その構築メカニズムや社会的作用が研究課題
- 観光人類学では、そうしたゲストの「まなざし」やふるまいがホスト社会や文化にどのような影響を及ぼすのかが研究課題 * 博士論文で整理しました
- その「まなざし」や「期待」は、当然ながら観光地の情報総体から一部切り取った情報によって構成されている。

1. 『ジャンク』と残酷映画

—観光(見世物)のまなざし

- そのため、ずれるのは当たり前
- 観光が、冒険や放浪と異なるのは、何らかの前情報に基づいて、確認行為を行っている点。
- 観光は、原理的にこうした「ずれ」を内包している。
- 逆に、全く「ずれ」が無いなら、わざわざ現地に行く必要もないので、観光動機は生成されない。
- この「ずれ」は、ゲスト側にとってみると「修正すべきもの」ではない。(観光が楽しみのための行為であり、地域にコミットする必然性はないため)
- むしろ観光地としての成功は、このずれをいかに満足させるかにかかっている
 - 「見世物的まなざし」が含まれる

2. 『水曜スペシャル 川口浩探検隊シリーズ』 —偽物の中でのリアリティ

- 『ジャンク』と同時代の日本のテレビ番組を取り上げ、その後、時代の変遷とともに、観光(見世物)のまなざしがどのように変化していくかを見てみたい。
- 『水曜スペシャル』1976年4月28日～1986年3月26日
(水曜19:30～21:00の番組枠)
- 川口浩探検隊シリーズは、1985年11月で終了
- 原因として、やらせ疑惑と川口氏の病
- 川口浩をリーダーとした探検隊が、幻の〇〇(類人猿、ヘビ、サメ、ピラニア、トラ、ターザンなど)を探しに行く

2. 『水曜スペシャル 川口浩探検隊シリーズ』 —偽物の中でのリアリティ

- 今のテレビ番組に比べてナレーションの速度が速い
- 今見ると、「やらせ疑惑」というより、明らかな「やらせ」
- とはいえ、「疑惑報道」がなされて番組が終了したということは、表向きは「真実」を伝えていることになっていた。
- つまり、建前上、番組内では「リアリティ」を重視していることになっていた(当時から嘘と分かって楽しんでいた人もいるはずだが)
- 「虚構空間」そのものは、
「本物であること」が求められていたと言える。
- 「嘘である」とは言わない(『ジャンク』も同様のアプローチ)

3. 『水曜どうでしょう』

—「二重構造」の物語と実践が観光のまなざしを変える

- 『水曜どうでしょう』(レギュラー放送は、1996年～2002年。単発で現在も新作が作られている。)
- 北海道テレビ(HTB)制作。深夜番組。
- 主に、大泉洋(タレント)、鈴木貴之(タレント、タレント事務所社長)、藤村忠寿(ディレクター)、嬉野雅道(ディレクター、カメラ)の4人が旅をする番組
- 「水曜どうでしょう」の由来
 - ・『水曜ロードショー』のもじり
 - * イントネーションは「ロードショー」と同じように読む
 - ・「こんな番組作ってみました。どうでしょう？」

3. 『水曜どうでしょう』

—「二重構造」の物語と実践が観光のまなざしを変える

●物語の二重構造

- 「物語」と「メタ物語」
- 虚構空間と現実空間の橋渡し

佐々木玲仁(2012)『結局、どうして面白いのか

—「水曜どうでしょう」のしくみ』フィルムアート社

●製作工程のさらけ出し(「やらせ」(作り事)前提)

「桜前線捕獲大作戦」という企画(1998年5月放送)

- 上記企画で訪れた場所をめぐるツアー—商品

「東北2泊3日生き地獄ツアー」

- このツアーに出演陣が別行動についていくという企画が放送される(1999年1月～2月放送)

3. 『水曜どうでしょう』

—「二重構造」の物語と実践が観光のまなざしを変える

●本番組によるその後の影響

『モヤモヤさまぁ〜ず2』（2007年）

『ブラタモリ』（2008年）

- * スタッフが普通に画面に映る
- * その地に向けられる伝統的「まなざし」ではなく、見る側の「まなざし」が優先された（『ブラタモリ』の場合は、それが地理学的正当性を持つため伝統的な価値観でも評価されるが、あくまでタモリのマニアックな視点を重視）

●実際の旅行のあり方も、色々な意味で旅人主導に

* 『n次創作観光』『コンテンツツーリズム研究』等、ご参照ください

4. 『探検隊の栄光』

—虚構を前提とした「多重構造」の物語へ

- 『探検隊の栄光』小説：2012年 映画：2015年
- 主演：藤原竜也 監督：山本透
- 『川口浩探検隊』のメタなパロディ
- 藤原竜也という俳優の現実的な立ち位置も取り込む
- 虚構と現実を多層的に重ねて見せる
(幻のヘビ「ヤーガ」を追ってジャングルに分け入るが、
トラブルに巻き込まれ、「やらせ」で「ヤーガ」を出現させる
ことでトラブルを回避する。その瞬間、本物のヤーガ
が目撃される。が、かなりチープなCG。)

4. 『探検隊の栄光』

—虚構を前提とした「多重構造」の物語へ

- 虚構／現実という対立軸から、
そもそも虚構と現実は入り混じっていることが
前提とされたメタな語りへ
- 観光学の文脈で言うと
「オーセンティシティ(真正性)」について
是としても否としても議論が空転する状況
- 観光と虚構の関係性について考える際の
新たな視座になり得るのではないか